
魔王と呼ばれた女

雲間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と呼ばれた女

【Nコード】

N4276T

【作者名】

雲間

【あらすじ】

北穂 真子は気がついたら異世界トリップしており、右も左も分からない状態に。飢えて死にそうになっていると、助けてくれたのは人ではなく、犬のようなモノ。黒髪黒目のせいで現地民には恐れられ、魔王と呼ばれるようになっていた――。そんな救われない運命を辿ることになった、一人の女の話。

始まり（前書き）

グロ注意。

始まり

何か、食べ物か飲み物が欲しい。こんな些細なことを、これほど切実に思ったことなどなかった。喉はカラカラ。お腹は空いているを通り越して、気持ちが悪い。

水分を失いたくないのに、涙は眼から零れ落ちていく。一滴も無駄にできなくて、舌で流れる涙を口に入れる。

——どうして、こんなことに。

問いかけても誰も答えてくれはしない。周りは草木の生えていない荒野。誰も通ることのない、陰鬱な空気が漂う広大な土地。

そんなところに今年中学に入ったばかりの、土で汚れた黒のセーラー服を着た、北穂^{きたほ} 真子^{まこ}が這いつくばっていた。

気が狂う程の時間を過ごしたと感じているのに、実際は3日しか経っていない。

……もう3日、まだ3日。本当に狂うことができしまえれば良かった。それほど、真子にとって今の状況は、厳しいものなのだ。

入学式が終わり、新しくできた友達と一緒にの帰り道。他愛もないおしゃべりをしながら、歩いていたはずだった。瞬きをし終わった時、目の前にあったのは何も無い荒野。

歩いていた道路も、友達も、持っていた鞆も、何もかもがなくなっていた。自分がどうにかなってしまったのではないかと、さんざん頬を叩いたり抓ったりしてみたが、目に映るものはなにも変わらない。

上手くやっていけるかどうか分からないけれども、希望を抱いて

いた中学生生活。それが、瞬く間になくなった。あるのは、行き先の見えないただっ広い荒野。

突如の出来事に、パニックに堕ちいつて泣き叫んだ。夢を、希望を奪われてしまったと、ぶつける当てもなく叫びまわる。

親は？ 家族は？ 友達は？ 学校は？ 私は？ 一体どうしてしまったのかと、一人聞く者もないまま、叫んだ。

されど現実が変わることなく、真子の前に立ちふさがる。泣き終えても、真子のいる場所が荒野であるのに変わりはなく。

その後は、必死に歩きまわった。何かあれば、何かあれば何かが出来ると当てもなく信じて、歩きまわった。何かがあると信じなければ、真子の心は壊れてしまいそうだったのだ。

次第に喉がかわいて、お腹もすいてきた。しかし、周りには水も草も何もない。当然飲み食いもできない。心と体が求めているのに、なにもできない。真子は肉体的にも精神的にも、徐々に衰弱していった。

3日。もう真子は疲れと飢えで動けず、地面に這いつくばっている。このまま死んでしまうのではないか、そんな恐怖を抱いて。

死んだら、元居た自分の場所に戻ることができるのではと、根拠もなく思ったりもした。そんな中、なにもない場所から、あるモノが真子の視界に現れる。

「……な、に。また……、あな、た？」

犬のドーベルマンを150cm程の大きさにし、更に鋭い牙、何もかも切り裂きそうな大きな爪、黄金に光る瞳、悪魔のような長く細いしっぽを持った、生き物。

どういうわけか最初の日から、真子が歩き疲れた夜に現れた。特に何かをするわけでもなくただ真子を見つめ、真子が眠りにつくと

消えている。

初めて出会った時は、その凶悪な姿から、てっきり襲われてしま
うものだと思っていた。しかし、逃げようにも疲れ果てており、逃
げることはできない。

恐怖で段々と激しくなる呼吸、背筋は寒気を通らせ、気持ち悪さ
を助長させる。混乱しきった真子を襲うなら、今が好奇。

……けれども黒の生き物は、一切真子に対して何もしなかった。
本当に、見つめるだけ。

睨み合いを続けていたのだが、次第に疲れきった体が睡眠を促し、
いつの間にか真子は眠ってしまったのだ。二日目にも現れたが、同
じように見るだけで終わった。

きつと、自分の死を待つ死神なのだ。だから夜に現れ、疲れて体
力もない頃に現れる。死神であるならば、早急に殺して欲しかった。
さすれば体の疲れから、空腹から、苦しみから、生から逃れるこ
とが出来る。

真子の苦しみは、頂点に達していた。生きるのが嫌になってしま
うほどに。

「もう、……わ、たし、しぬ……の。も……、さっさと、……わ
たし、の、た……まし、い、とっ……ちゃえ、ば？」

早く。早く苦しみから開放して欲しい。空腹を満たしたい気持ち
も、家族を求める気持ちも、平穏な生活に戻りたい気持ちも、ずつ
と持っているのは辛かった。

自分以外なにもない中、気持ちを維持することは、苦しみでしか
ない。希望は、一粒もないのだから。

疲れきった真子の言葉を聞いた瞬間。——黒の生き物は自分の腹

に自分で噛み付き、喰いちぎった。

「ひっ……！！」

血が、ちぎり取った肉から、体から、口から地面に流れていく。喰いちぎられた場所からは、生々しい赤とピンクで彩られた『中身』が見えている。

繊維が、血管が、肉質が、血が、何もかもが剥き出しになっていた。本物の生き物の中身など生まれて始めて見た真子には、とてつもなくキツイ。気持ち悪さが限界を超え、胃液を吐き出した。

「う、え……、うええ、っ」

黒の生き物はしつかりとした足取りで真子の真ん前まで来ると、真子の口に血の滴る喰いちぎった肉を近づける。意図が分からず、必死に顔を背けた。

鉄の匂いが、ますます真子の気持ちを落としていく。長らく攻防をしていたが、首を背ける力さえ失った真子は、黒の生き物を見据えることとなった。

黒の生き物の瞳が、真子へ真髄に訴えかけている。

ただひたすらに「生きろ、死ぬのは許さない」と。

訳が分からなかった。何故、このような事をするのか。真子が生き残ったとしても、黒の生き物に何の得もないというのにだ。

自らの身体を削ってまで、自分を生かそうとしている。そう、自身の体を削ってまで。

自分の為に、こんなことをさせてしまったのだ。

例えば。もし自分が誰かのために何かを差し出したとしよう。どうしてもその人には生きてもらいたい。自身が渡すものがないと、その人は死んでしまう。

今、その状況に真子はあった。黒の生き物が『自分』、『その人』が真子。

真子が『自分』であつたのならば、『その人』には絶対に生きてほしい。『その人』が親だったら、死んでしまうのは勿論嫌だ。

もう一度、戻して考える。今の真子の立場は、『その人』だ。『自分』の気持ちを、受け止める側。自分が『自分』だったら、受け取って欲しい。『その人』が助かるのだから。

思考を現実に戻し、黒の生き物の眼を見つめる。揺るがない、決意の籠った瞳だ。愚直に真子を見ている。これほどまで強い視線を向けられたことがあつただろうか。

芯の通つた瞳に、真子の心は折れた。

……恐れが真子に躊躇させ、口を大きく開けるのに中々の時間がかかった。それでも、黒の生き物は真子をひたすら待つ。開ききった時、黒の生き物は真子の口の中に、挟んでいたものを落とした。

——気持ち悪い。気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い！
！！

ぶにぶにとした食感、鉄の味。胃液と混ざつたおいしいとは絶対に言えない代物。それを、泣きじやくりながら、感謝しながら、懸

命に噛み切り、……飲み込んだ。

吐きたい、吐きたいと訴えてくる。あがってくるものを、手で口を抑え必死に抑えた。

生きる。それだけのために。

完全に、真子の中でモノが吸収されるまで、吐き気は続いた。

安らぎ

「ベル、本当にありがとう！」

黒の生き物——ベルの頭を撫で、ベルから降りる。

あれから。モノを食べた真子の体調は、見る見るうちに回復していった。異常な回復の速さに驚いたものの、きっとベルの力か何かなのだろうと勝手に納得した。そうでもない、説明がつかない。軽い空腹感があったものの、食べる前とは段違いのものであったので、多少の我慢はできる。真子が回復している間、ベルの引きちぎっていた部分も、元に戻っていた。

動けるようになったところで、ベルは顔で自身の背中と真子を交互に見る。乗れ、ということなのだろう。馬にも乗ったことがないので少々不安だったが、己を見るベルを信じて背中に乗った。

途端、ベルは一気に走りだす。びっくりして落とされまいと、ベルの首に腕を回し、抱きつくような体制にする。景色は車に乗っている時のように飛んでいった。

ベルに乗ってから、真子の感覚で2時間経った。辺りはのぼってきた太陽によって照らされている。掴まるのに必死で気がつかなかったが、進むに連れて地面には草が生えていき、更に進むと木が現れ始めた。

草木があるということは、水があるのだろう。もしかしたら木の実なんかもあるかもしれない。何かを口に含むことができる。そう考えると嬉しくてたまらなくなった。いくら空腹が少し抑えられた

とはいえ、空いているものは空いているのだ。

草木に囲まれた神聖な感じのする泉に辿り着くと、ベルは止まって真子が降りるのを待った。ひと撫でして声をかけると、真子はベルから降りる。そして、一目散に泉へと駆け寄った。

まず、手のひらを綺麗に洗う。土にまみれた手が、ここに来る前のように綺麗になった。洗った場所から少し移動して、手で水を掬うと、口に近づけ飲み干す。カラカラに渴いていた口内が潤っていく。

3日ぶりの水。これだけでは全然足らず、何度も何度も気がすむまで掬って飲んだ。……ただの水がこれほどおいしいものだとは思わなかった。

十分に水を飲んだところで、真子は体を洗いたくなってきた。髪と体は土で汚れ、何度も汗をかいている。全身がむず痒くなってきた、速攻服を脱ぎ始めた。

羞恥心は、体の汚さと比べたら、あってないようなものだ。戸惑うことなく、身にまとっているものを全て脱ぎきる。

朝方なこともあって、水は冷えており、寒さに体を震わせた。プールに入っているのだと思うようにしながら、中に入っていく。

体に染みる水が、全身の汚れをとっていく感じがした。もっと落とすためにも体を両手で擦り、髪の毛は頭皮を揉むくらいで済ませる。大分落ちたところで、真子は泉からあがっていった。

そういえば体を拭くタオルがない、と今更気が付き、辺りを見回すが当然ない。考えなしに入るからそうなるのである。服を着るにも、濡れたままの体で着るのは駄目だ。

乾いているのに濡れてしまう。だからといってこのままにいるのもまずい。どうしようかと悩んでいると、今まで静観していたベル

が、歩み寄ってくる。

「ベル？ どうしたの？」

ベルが間近に来たと思ったら、地面に体をおろして真子を見てくる。よく分からない行動に困って棒立ちになっていると、長い尻尾で背中を軽く叩かれる。

こっちに来い、という眼差しだ。……湯たんぽにでもなっくれるのだろうか。

「……ありがとう、ベル。ベルは本当に優しいね。でも、ちょっと待ってね」

暖まる前に、服を洗っておきたかったのだ。まだ朝であるし、これから陽が昇ってくる。乾くのが早くなるだろうから、今のうちにやっておくしかない。

先に、乾きの遅いセーラー服を、手を使って軽く濡らし、はたきようにしておく。下着や靴下は水に浸けて擦り合わせておいた。ついでに靴の中も軽く洗う。全部洗い終わったものを、背の低い木の枝にかけた。

「お待ちせ！ 待っていてくれてありがとうね、ベル」

ベルは返事代わりに尻尾を揺らす。優しくしてくれるベルに、嬉しくなって笑顔になりながら、座ってベルに寄りかかる。ベルもまた、真子を包むように丸まった。

じんわりと肌を通して染みる暖かさが、優しくも辛かった。

ここにいる。北穂 真子はこの未知の世界にいたのだと、再認識させるのであった。

苦しみ

どうやら、そのまま眠っていたらしい。陽は完全に昇っており、暖かな日差しが真子に降り注いでいる。ベルが暖めてくれたおかげで、風邪をひくことはなかったが、流石に素っ裸のままなのはまずい。

ベルにお礼を言ってから、引っかけていた服をさつさと着て、最後に靴を履く。多少湿っているが、問題ないだろう。服を分ける範囲で整えた。

問題はこれからである。心機一転することはできたが、これからどうするのは決めていない。とりあえず、空腹を訴えている自身のお腹をどうにかすることから、始めようとしたのだが。

「――！！」

何を言っているのかは分からないが、人の声がした。声の方に振り向くと、そこには中世ヨーロッパあたりの、体の線が見えない全体を覆うワンピースを着ている、薄暗い金髪の女性が、驚いた顔をして真子を見ている。

目が合った途端に、女性は持っていた木製の桶を落とし、悲鳴をあげながら混乱した様子で逃げていく。どうして逃げたのか、真子にはよく分からなかったが、ようやく会えた人だ。

言葉は理解できないとはいえ、同じ人間であるし、身振り手振りでなんとかなるだろう。

……ここに来てからは『一人』だった真子。普段ならば一人でい

る時間など、そうそうなかった。寧ろ煩わしいと思い、一人になりたい、そう考えていたのだ。

いざ、一人——好きで一人になったわけではないが、なってみると、人が恋しくてたまらなくなつたのである。そして、思い知つた。自分が周りの人にどれだけ支えられていたかを。

一人では、何も出来ない。今回だって、ベルがいなければ真子は何もできなかった。

考えて見れば、真子が学校に進めるのも、ご飯をお腹いっぱい食べれるのも、健康に楽しく生活していけたのは、両親や周りの人のお陰だ。一人になってみて、初めて気がつく。

当たり前のことばかりで、気づくことはなかった。きっと、あのまま成長していても、気がつかなかつただろうと真子は思う。今、気がつくことのできた真子には、人との繋がりが欲しくて堪らなかった。

人との繋がりがこそが、自分を支えてくれるものになるのだから。そう思つた真子は、女性を追うことにした。

ベルのことをすっかり忘れて。

女性は長いスカートであるのに、走るのが早かつた。外で遊ぶのが嫌いで、授業の体育や運動会が嫌いだった真子には、少しきつい走り始めてからそんなに時間が経っていないというのに、すでに息はあがつてる。

女性と距離も離されていき、走ることをやめてしまえば、女性が見えなくなってしまう程だった。……見失ってしまうのは駄目だ。繋がりが持てなくなってしまう。体力は殆ど底を付き、気力だけで真子は走っていた。

もう無理だ。限界を感じた時には、女性を目視できないほどの距離になってしまっていた。よって女性を追うことはできない。折角人と出会えるチャンスを捕まえられたのだ。追えないからと言って諦められるわけがない。

走るのをやめ、周囲を散策することにする。人がいる以上、どこかに文明の痕跡か、誰かいるはずだ。あがった息を整えながら、周囲を見渡す。

周りは木ばかりであつたが、ふと女性が行つた先を見ると、人が一人くらい通るのに楽そうな道があつた。先程は気が付かなかつたが、女性はこの道を辿つていたらしい。通りで石や、木の根に足を躓かせることがなかつたのだ。

道を辿つていくと、木が少なくなり、切り株が増えていく。道も一人が通れる、ではなく三人通れるような広さに変わつていった。更に進んだ先には、真子の待ち望んでいた、人の住む場所。

木製の西洋風農家みたいな家が軒々と建っており、全ての家をひとまとめにするように木の柵があつた。真子が来た方向は裏口なのであろう、簡素な戸があるだけで、恐らく村であるここの正式な入り口には見えない。

となると、ここから入るのはまずいのではないか？ そう思い、柵に沿つて本来の入り口へと行くことにした。

どうやら、ここが正式な入り口らしい。今は開いたままになっているが、大きな観音開きの戸がある。ここからならば、入っても大丈夫だろう。意気揚々と、真子は村へと入つていった。

村に入つたはいいが、人がいない。外から見た時も人が見当たらなかつたのだが、中に入れば門番か誰かしら居るだろうと思つてい

たがゆえに拍子抜けした。

言葉の通じない中、どうコンタクトしていいのか、どうやって仲良くなっているのか、頭の中であれこれ考えていたのだ。

初対面の人と話すことは苦手な真子。シュミレーションしなければ、緊張で固まってしまって聞き取れない声でしか喋れなくなってしまう。故に、何通りものシチュエーションを考えていた。

だというのに。

村の中に進んだ先にあった広場。おそらく村中の人が集まっているであろう人数がいた。女性は長い色とりどりのスカート、男性は麻で作られた、それぞれがいろんな色の無地の服を着ている。

色の濃さ薄さは様々であるが、大体が金色の髪の毛であった。皆、何かを相談しているのか、丸くなって何かを話している。こんな中話しかけるのは、日本人の気質を受け継いでいる真子には、相当な勇気を出さないとイケない。

かと言ってこのまま、まごついていくわけにもいかないのだ。悪いなあ、怖いなあと思いつつも、なけなしの勇気を振り絞って真子は声をかけてしまった。

「……あ、あのー!!」

一斉に全員が振り返る。全員振り返ったことに心臓の鼓動を早くさせた。ボディランゲージをしながら、思い浮かぶ言葉を必死で言葉を紡ごうとする。

「わ、私、よく分からないんですけど、ここにきちちゃって、ええと、ええ、エクスキューズミー? は、ハウアーユー? ええと、ええと、

「——!!!!!!」

集団の中の一人が、真子に向かって、何かを叫びながら地面にあつた小石を投げた。

「え、……な、なに」

続くように二人、また一人と、真子に向かって石を投げる。

「ま……、まって、なに？ どうして？」

投げる。石は、真子に当たり始めた。集団の半数が参加している。

「待って！ 待ってよ！！ 私の話を聞いてよ！ やめて！！」

只、投げる。真子の言葉を呪詛としかとらえずに。大粒の石が真子を傷つける。ほぼ全員が参加した。

「やだ、やめて、お願い、痛い、痛い、痛い！！　痛いよ！！　いい、痛い！！　痛い！！」

消えろ、失せろ、いなくなれ。災いよ、立ち去れ。思いを込めながら。血が出てきた。全員参加。

「やだ、やだあああああ、やだ、やだよ、おかあさん、おかあさ」

投げる。投げる。投げる。投げる。投げる。投げる。投

げる。投げるものがなくなった？ ならば農具でも何でもいい。投

げる。 投げる。 投げる。 投げる。 投げる。 投げる。 投げる。 投げた。
 ぐさり。

「あ、あああああああつ！！　助け、助けてよおおおおお
あああああああああ、助け、てえ……、助けてえええええ
えええええええええええええええええ！」

才

真子の叫びに呼応し、凄まじい叫びが辺りの音を抹消。悪雲が立ち込め、辺りは湧きでてきた黒の異形の魔物達によつて、黒に染められていく。そして、黒から赤に、ポツポツと変わつていった。少しずつ、確実に。真子の目の前で行われた。

血の宴が。

喰われていく村人。喰いちぎられていく女性。首が飛ぶ男性。上半身を失った子供。真ん中をまつぶたつに斬られた老人。黒は何も言わず、機械的に人を壊す。

あるものは喰う。あるものは斬る。あるものは殴る。あるものは千切る。それが使命だともいうかのように。泉で会った女性の、首が真子の前に転がってきた。大きく見開かれた瞳と眼があつた気がする。

黒が飛び交えば飛び交うほど、真子は生ぬるい赤で染まっていった。

——これは夢だ。夢に違いない。夢だからこんな怖いことが起るし、こんなことができるんだ。夢だ。そう、夢。夢なんだ。夢。夢。現実じゃない。現実なんかじゃない。……こんな悪い夢を見るだなんて、よっぽど夢見が悪いなあ、私。

現状を拒否して現実逃避する真子の隣には、いつの間にかベルが寄り添っていた。

揺らぐ

——人と会う……、夢を見てた。夢。夢。夢。そう、夢。だから、あんな怖いことはなかったし、黒い化け物が出てきたこともなかった。全部、夢。夢だったんだよ。夢。私は、夢を見てたんだ。

『夢』から醒めた真子。昼間よりは弱い、太陽の光が眼にしみる。図工……ではなく美術の時間で、絵の具をぶちまけてしまい、体中を赤と黒に染めてしまった。真新しいセーラー服は赤と黒で汚れてしまっている。

折角新しいのだ。汚れたままにしておくわけにはいかない。地面に横たわっていた体を起こし、ベルによって連れてこられた泉へ、今度は服を脱がず飛び込んだ。

泉が赤と黒に染まっていく。服は水を吸収し、体が重くなる。このままでは沈んでしまう。けだるいと思う感情が、陸に上がるのを中々許さない。

——……沈むのも、いいかもしれない。このまま、深く、深く。沈んでいってしまえば、私は……。

全て沈んでしまいそうな時、急に意識がはっきりとして慌てて浮こうともがく。なんて事を思ってしまったのだろうと自分を恥じながら、手かきをしながら泉の縁まで行き腰掛けた。

赤と黒は絵の具独特の臭いはせず、鉄の臭いがする。疑問に思い

ながらも、兎に角洗い流すことを優先させた。時間が経ってしまったので、なかなか汚れは落ちにくい。かといって汚れたままにしておくのは駄目だ。

母親に怒られてしまう。入念に、擦り合わせたりして赤と黒を落としていく。絵の具のだまらしきものもあり、取ろうとすると気持ちの悪い触感がして顔をしかめる。

髪の毛にも、しつこく絵の具がこびりついていた。全部落ちていくか確認するのも兼ねて、セーラー服と靴、靴下を脱いで泉の中に入っていく。

一通り服も体も洗い終え、泉から這い上がる。髪の毛の水分を手で絞りながら泉を見ると、全てが赤黒い水へと変化していた。真子が入る前の綺麗な泉を思い出し、汚してしまったことに罪悪感を抱く。

——本当に、それだけ？

「……え？」

自分が来なかったら、泉は綺麗なままだっただろう。赤色に染まることはなく、美しいままだったはずだ。それだけ。それだけだというのに、違和感が真子を襲う。本当に、泉を汚したことだけに罪悪感を抱いているのか、と。

風が吹き、水に濡れている真子はいつそう寒く感じ、身震いをする。体の芯から、冷えてしまっている気がした。

草を踏む音がする。振り返ると、枝をくわえたベルがこちらに歩いて来ている。何故枝を？ そう思い、真子からも近寄って見てみると、枝の先には、赤くて小さい木の実がなっていた。

「もしかしてベル、私に？」

ベルは何も言わず、真子の瞳を見つめる。長いしつぽを左右に揺らすだけだった。犬は、嬉しいとしつぽを揺らす。ベルにも適応するかは分からないが、そうではないかと思っ、真子はベルから枝を受け取る。

「ありがとう。……嬉しい」

お礼も兼ねて頭をなでると、一層しつぽの動きが激しくなった。この分だと、犬と同じような性質だと思っ、いいだろう。自分の為になにかしてくれるのが、真子は嬉しくてたまらなかった。ここで喜びをくれるのは、ベルだけなのだ。

枝から、赤い木の実を取る。木の実は、さくらんぼのような形でいちご程の柔らかさをもっていた。どんな味がするか分からず口にふくむのを戸惑うが、お腹のすき具合には勝てずに、すぐに口にすると。

「あ、おいし……う、え、……ぐっ、うえええ」

甘かった。柔らかかった。おいしいと思っ。けれど、すぐに真子は吐いてしまった。無残な姿になった木の実は、地面に落ちてゴミと化する。

口の中に何かがあるのが、気持ち悪い。口の中にものを入れておきたくない。そう、感じてしまったのだ。

今も空腹を訴えてやまないというのに、どうしても食べることができなかつた。今一度、チャレンジする気はおきない。

「う、ごめんね、ごめんね、ベル、ごめんね……」

折角真子にと木の実を持ってきてくれたというのに、ベルの好意を無駄にしまった。あんなにしつぽを振って喜んでくれていたというのに。ベルは、心配そうな瞳で真子を見ている。

何かがおかしいと感じ取っているのに、何がおかしいのかはさっぱり分らない。分きたいと思っているのに、どこかで分らないと思うている自分がある。

矛盾を抱える自身が、怖かった。

ベルに謝っているはずなのに、いつの間にかベルの首に腕を回して縋りついていた。

真子の知らぬところで、物語は進んでいく。

『夢』の中で、逃げ切った一人の男が、とある街にたどり着いた。「魔王が現れた」、そう言いながら。

そう。真子の知らぬところで、自身の運命が決まっていく。

それはもう、誰にも止められない。

触れる

お腹が空いた。今の真子は、空腹を満たすことしか頭にない。

他の果実も口にしてみたが、果実のような柔らかい生ものだと、おいしいと感じても即吐き出してしまった。……違うものならば、いけるかもしれない。生ものではない、別の食べ物。——パン。真っ先に思い浮かんだのはそれだった。

本当ならば、それ以外にも色々あるはずなのだが、今の真子は思い浮かんだパン以外の選択肢を忘れてしまったのである。

パンがそこらに実っている訳も無く、必然的に人に会いに行かなくてはならない。かなり湿ったままの服を着て、泉の綺麗な部分の水を飲めるだけ飲み、ベルを伴って泉から出発した。『夢』で歩いた場所には、行かないようにしながら。

始めは歩いていた。ベルに助けられてばかりで、情けなくてしょうがなかったから、今回は頼らず自分の力で行くとしたのだ。しかし体が疲れを訴えた辺りで、やけにベルがしっぱを使って真子の背を叩く。

散々叩いた後、自らの背を叩いた。乗れ、ということだろう。今回は自分の力で頑張ろうと決めたのだ、絶対に乗ってやらない、と訴えてみせたが、ベルは悲しそうな瞳で真子に訴えかけてくる。

乗らないの？ 乗らないの？ 僕悲しいなあ……。とでもいわんばかりに。……好意に弱い真子が撃沈しないわけがなかった。助か

るとは思いつつも、罪悪感に苛まれながらベルの背に乗り、腕を首に回す。

そんな訳で、無事に目的地に辿り着くことができたのであった。

ベルから降りて、辺りを眺める。木に囲まれた石造りの大きなくつかの屋敷が、あちらこちらに若干の距離をとりながら立っていた。其々が囲いをもっており、自分の領地であると主張しているように、少し怖く感じる。囲いの中は、色とりどりの花が咲いていた、綺麗な噴水があったりするのだが。交流をとろうとしないような閉鎖的な感じが、真子には好きになれなかった。

着いたとはいえ、屋敷ばかりでどうしようか困ってしまった。住宅の並ぶ街ならば、個人店があっただろう。そこから廃棄するパンの耳とか貰えればいいな、と思っていたのだ。最も、成功するか否かは度外視していた。

上手くいかない現実に、頭を悩ませる。これから、どうしよう。考えても考えても出ない結論。訳の分からなくなった頭を整理するために、周囲を歩き回ることにした。

もしも人と出会った時に驚かれないよう、ベルには屋敷から少し離れた場所に待機してもらおうよう、お願いする。ベルは真子のお願いにかなり洩った様子を見せていたが、最終的には言う通りにしてくれた。

一等大きな屋敷の裏庭に、真子は佇んでいた。……甘い、砂糖菓子
子の匂いが漂っていたのだ。匂いに釣られて、裏庭まで来てしまった真子。美味しそうな香りに、お腹は早くモノを入れろと訴える。腹からの指示に従いたいが、意のままにしてしまうのもまずい。香り漂う場所に行ったとしても、森の中を浮浪している不審者に、

菓子をくれるはずもないのだ。

——諦めよう。木の実を頑張ってお腹の中に入れればいいや。そうすれば、誰にも迷惑かからないし……。

踵を返し、泉へ戻ろうとしたその時。真子以外の、草を踏む音がした。

「——？」
「っ！？」

振り返ると、17、8歳であろう、青年が真子を見て驚いている。短めの金髪に、海のように深い蒼い瞳。白のワイシャツに薄藍色のベスト、深緑のズボン。背は149cmの真子より、20cm程大きい。甘いマスクを持つが、誠実そうな顔立ち。貴族と言っても違和感のない青年だった。

金色。胸の中に氷が落とされた感覚が襲ってくる。本物の金のごとく輝く髪の毛。通常ならば見惚れるところだが、怖いと感じてしまう。奥底から、黒いものが押し寄せてくる。這い出る奇妙な感情を振り払うが如く、頭を一振りさせた。

呼吸を荒くさせながら立ち竦む真子に、青年は話しかけてくる。

「——？」
「え、えっと……」

青年は何か言っているが、言語は日本語ではなく、英語でもないようだった。もしかしたら真子が聞き取れないだけで、英語を喋っているかもしれないが。ネイティブの英語は流暢すぎて、真子には聞き取れない。

「えっ、え、どうしょ……」

「――！」

身振り手振りでなんとかしようにも、パニックに陥っていて、どこからどう始めればいいのか分からない。眼をあちこちに飛ばして焦っている真子を見て、青年は真子の肩を両手で軽く叩く。

「――、――」

優しい微笑みをかけ、真子に何かを言う。言葉はわからないが雰囲気からして「落ち着いて」だろうか。多分そうではないかと当たりをつけ、深呼吸をし自身を落ち着かせる。青年はおとなしくなったのを見て笑みを深め、右手で真子の頭を撫でた。

「あ……」

肩と頭から伝わってくる暖かい、ベルとは違う人のぬくもり。目頭が熱くなり、涙が溢れて落ちていく。喜びが、嬉しさが、幸せが、真子の中を駆け巡る。望んでいた。求め続けていた。ここへ来る前から、ずっと。自分以外の暖かさを。

小さい頃から、何かと頭を撫でられていた。真子はかわいいね。という言葉と共に。撫でられると同時に感じる人の体温。嬉しくて何度も強要した。もっと、もっと撫でて！ 両親も可愛い我儉だと思って受け入れてくれていた。弟が生まれるまでは。

弟が生まれ、真子は長女になった。お姉ちゃんになった。お姉ちゃんでしょ、しっかりなさい。弟が生まれてから、真子が甘やかされることは少なくなり、撫でられることもなくなっていった。

けれども、お姉ちゃんだから甘えることなんて出来ない。弟が甘

やかされて育っていくのを見て、嫉妬した。今まで自分に向けられていたものが、弟に注がれていく。置いてきぼりにされた感覚が常につきまとった。

——今までそこにいたのは私だったのに。私を、見て。私を見て。お姉ちゃんとして頑張ってるんだよ。勉強だって、学校だって、頑張ってるんだよ。見て。見てよ。私を見てよ。弟ばかり見ないで私を見てよっ！！！！

弟は可愛かった。整った顔立ちに、周りを癒す雰囲気。真子にはないものが、弟にはあった。羨ましくて、憎くて、一時期は殺してやりたいと思うことさえあった。しかし、愛情が弟に向けられて憎くても、悔しくても、真子の弟であることに変わりはない。弟も、また、家族であつたのだから。

家族は憎むものではない。慈しみ支えあう関係だ。最後に頼れるのは、家族なのだから。そう教えられた真子は、弟を憎みきれなくなってしまった。憎たらしい、けれど可愛い弟。そうやって、受け入れようと努力し、定着させた。

結局、真子は甘えることが下手なまま育った。自分でできるよう、弟にかかりきりな両親に迷惑をかけないよう、ひたすら頑張るようになった。いつでも、人の温かみを求めて。

望んでいた人との関わりで得たものは、心と体に染みわたり、涙は止まることを知らない。突如泣き出して、相手が困っているかもしれないというのに。止めなければならないと思って、一度許した涙腺は止められなかった。

母の、ぬくもりを思い出す。暖かくて眠くなってしまう、遠い昔の感覚。まるで昔に戻ったようだった。

「うっ、……うめんなさっ、……うっ、うああ……、うめっ……」

「――」。

言葉は理解出来ない。されど、青年のいたわりの気持ちは声色で伝わってくる。青年の優しさに浸け込んで、彼のシャツを握りしめて縋りついた。伝わってくる人の生ぬるい温度が、苦しくも嬉しい。まるで、甘い毒だ。知らぬ間に青年の腕は、真子の背にまわっており、いたわるように撫でてくれていた。

真子は今、この世界に来てから初めて、張っていた緊張の糸を落とした。

和やか

「——アルトウール。——？」

「あ、あうつーゆ？」

自分で自分に、「めんつゆか」と突っ込む。何にでも合う、あうつーゆ発売中！ とでもありそうだ。変なことを考えつつも、まらない舌で発音していく。今、真子は裏庭で地べたに座りながら、青年——アルトウールの名前を呼ぶ練習をしていた。

「——、アルトウール。——」

「あるちゅーゆ」

あるしゅゆ。醤油をつかった食べ物が食べたいな、と思ってしまった。先程たらふくお菓子をもらって食べ、甘い感じが残っているというのに、醤油の味を思い出して口から涎がでかける。

口の中でとろけるお寿司が食べたい、醤油で味付けされた目玉焼きが食べたい、パリパリとした食感の餃子が食べたい、麺を嚼るとスープの味と絡まって美味しいラーメンが食べたい……。一度思い起こすと止まらない食欲を、名前を呼ばうとすることでなんとか止める。

「あるちゅーゆ！」

「——。アルトウール」

「うつうつ……。そんな発音できない……。あ、あるちゅーる！」

意外と難しい発音に、四苦八苦する真子。口を様々な形に変えて、どうにか舌がまわるようにしている。真面目な顔をして変顔する真子に、アルトウールは可笑しそうに笑う。

「――！――」

「もう！ こっちは一生懸命にやってるんだから笑わないでよっ！」

眉間に皺を寄せて拗ねた。そっぽを向いて、笑ったことに不満を漏らす。いくら言葉がわからないと言っても、文句を言いたくなるものだ。口を尖らせてぶつぶつと言っているのを気にしてか、アルトウールが真子の機嫌をなおそうと話しかけてくる。

なんとなく謝っているのだらうとは検討はついたので、いつまでも謝らせているのは悪い。未だにくすぶっているむかつきを抑え、アルトウールに提案した。

「……あのさ、私貴方の名前発音しにくいの。『アル』でいいかな？」

「――、アル？」

「うん、長いからさ」

アルならば簡単に言うことができる。我ながらいい案だと一人で頷いていると、アルトウールが一旦自分を指さし自身の名前を呼び、今度は真子を指差す。おそらく真子の名前を教えてくれ、だらう。につこり笑って真子は答えた。

「私はね、真子。えーっと、外人サンにはマコ・キタホって言えばいいのかな」

「ムアク？」

「違っよ、真・子！」

「ムアッ」

「もっと違う風になってない？ 真子！」

「ム、コ」

「真子！」

婿になってどうするの！ 私は女の子なのよ！ と、憤慨してきつく自分の名前を言う。ムツとしている真子に、アルトウールは口元を緩めながら、再度真子の名前を呼んだ。

「——。マツ」

「後もう少し！」

「……？ ——、……マコ？」

「そう！ 発音ちよつと違うけど……嬉しい！」

大輪の華を咲かせながら喜ぶ真子に対して手を伸ばし、頭を撫でる。なんだかくすぐったくって、身動きをした。一日でこんなにも触れられることなど、そうそうなかったのだ。

嬉しい半面、恥ずかしく思う部分もあり、中々素直に受け入れることができない。ぎこちなくアルトウールの行動を受け取っている真子に気がついていないのか、アルトウールはそのまま撫で続ける。

ずっと撫で続けられるのは耐えきれない、そう思った時、アルトウールが動きを止めて一点を睨み始めた。不思議に思っただけ視線を同じくすると、人と出会ったことによつてすっかり忘れていた存在が。

「べ、ベル……！」

真子を見て耳を垂らしたと思ったら、今度はアルトウールを見、耳を立て威嚇している。焦ってアルトウールからベルの元へと駆け寄った。

「ごっつ、ごめんね、忘れてたとかじゃなくて、その、ちょっと舞い上がったたというか、……ごめんベル忘れてた」

言い訳しようとしたが、忘れていたことは事実だ。素直に謝ることにした。謝っても態度を変えることのないベルに、益々焦燥感に駆られていく。忘れてしまっていたことに、かなり怒っているのだろうか。

事実、置き去りにしたようなものだ。怒ってしまうのも無理はない。今まで色々と助けてくれていたというのに、なんて恩知らず奴だろうと、真子は恥じた。

己を責める主人に、ベルは目を伏せゆっくりと頬を寄せて、優しく擦るようにする。怒ってないよ、とでも言いたげに。結局はベルの優しさに甘えることになってしまい、ますます真子は自己嫌悪に陥った。

落ち込む真子と、甲斐甲斐しく主人を慰めるベル。一人と一匹の間を引き裂いたのは、アルトゥールだった。間に割ってきたかと思うと、ベルを親の敵といわんばかりに睨んでいる。ベルが恐ろしい姿をしているから、敵だと思ったからやっているのだと思い、真子はベルの首に抱きつきアルトゥールに訴えた。

「アル、違うの。この子は敵じゃないの。私の大切な子なの。私を助けてくれた、命の恩人。悪い子なんかじゃない！ だから、睨まないで。優しい子なの！」

自身の命を助けてくれたベルに、初めて出会い仲良くしてくれたアルトゥール。真子にとって大切なモノ同士に、喧嘩などして欲しくなかった。切々と訴える真子に、アルトゥールは戸惑ったような視線を一度投げかけるが、ベルを睨むことをやめようとはしない。ベルも同じく、威嚇するのをやめなかった。困り果てた末に真子ができることは。

「も、やだ、……うつ、うあああつ、……ふ、二人の馬鹿あああ
ああつ！ 馬鹿馬鹿馬鹿！ 頭でつかちい！ 阿呆！ 馬鹿！ か
ば！ かばあああああつ！」

泣くことだけだった。分かってないからいいだろうと、あらぬ悪
口まで言う。突然泣き叫び始めた真子にギョツとして、一人と一匹
は睨み合いを解除し、なんとか真子をなだめようと努力し始める。
アルトウールは何かをあれこれ言いながら頭を撫でる。ベルはし
っぱで真子の背をいたわるようにさすった。けれども、泣くことで
自身を閉じてしまった真子に効くはずもなく、結局泣き止むまで、
ずっとこのままであった。

泣き止み、しゃっくりも止まって落ち着いたところで、真子は一
人と一匹を涙目のまま睨む。明らかに怒っている真子に、なにかを
することをやめる。……逆らってはいけないと直感したのだ。ムッ
とした表情のまま、真子は話し始める。

「……あのね？ 私、二人には喧嘩してほしくない。どっちも私に
とって大切な。好きな。だから、喧嘩はやだ。お願いだから、
喧嘩はしないで。私、二人とも大切だから、だからっ……喧嘩はや
だよお」

またも泣きそうな雰囲気になった真子を見て、気まずそうに喧嘩
したモノ同士で顔を見合わせる。暫く見つめ合いが続いたものの、
二、三言アルトウールが言ってから、一人と一匹の間にあった険
悪なものは薄らいだ。

とりあえずといったところではあるが、喧嘩をしないようにしよ
うと心がけ始めたことに、安堵する真子であった。

変わる

今まででは考えられないほどの、幸せな日々が続いた。幸せすぎて、これは夢なのではないのかと、何度も考えたものだ。思考に落ちる度アルトウールが話しかけてきて、真子を現実へと引き戻す意識が戻って夢ではないと分かり、安心のため息を何度もつく。

ようやく心地よい場所を手に入れることができたのだ。本当は夢だった、なんて日には発狂しかねないと、自分自身そう感じていた。

アルトウールと出会ってから、川の程近くにある大木の空洞を寝床にし、ベルと共にアルトウールのいる裏庭へ顔をだすようになった。とりあえず人と会うという目的は達成したが、今後どうするかは決まっていなかった。

なので、今後の身の振り方を決めるまでの間、アルトウールから言葉を習おうと思い、こうして通っていた。ベルは喧嘩腰になりがちなので、近くに待機してもらっている。争いごとは嫌だし、一々仲裁をするのも嫌だったからだ。回避できるのならば、ベルには申し訳ないがその方がいい。寂しそうな眼で見つめてくるのに、かなりの罪悪感が襲ったが。

「マコ？ ダイジョウブ？」

「へっ、……あ、ダ、ダイジョブ、ダイジョブ、シーパイシナデ」

苦戦しながらも懸命に話した結果、怪しい部分はあるものの、意志の疎通ができるくらいには話せるようになった。言葉を一から教えるのは大変だというのに、諦めずに話しかけてくれたアルトウー

ルのお蔭である。怒りもせず、見ず知らずの真子を労りながら、毎日付き合ってくれた。

どうやらここは横書きの文化らしく、文法は英語式のような。文字も地面に書いてくれたが、一文字一文字があまりにも複雑な線の塊で、文字を覚えることはそうそう諦めた。

アルトウールは会うと必ず食べ物を真子にくれる。大体おやつの時間に食べるような軽いものであり、お腹いっぱいとはまではいかない。けれども貴重な食べられるものだったので、とてもありがたかった。アルトウールがくれるモノ以外、食べられるのはなかったのだから。

その日は果物の入った、クレープのようなものだった。薄い皮で小さく切った色とりどりの果物を包み、赤のジャムらしきもので味付けしたものである。漂う甘い匂い、食欲をそそる見た目に負け、許可を貰いすぐさまかぶりついたが、やはり果物は駄目なのか吐き出してしまった。

「うえ、えええつ、やつぱり、駄目っ……！」

「マコ！？ …… ユツクリ、オチツイテ。ユツクリ」

果物を嚙んだ時の感触が、どうしても駄目で食べられない。吐いているというのに、アルトウールは嫌な顔ひとつもせず、甲斐甲斐しく真子の背をさすったりする。折角の食べ物を駄目にしてしまった。もったいないことをしたのに、世話までしてくれるアルトウールには本当に申し訳がたたなかった。

何故アルトウールはこんなにも自分に良くしてくれるのだろう。アルトウールが与えてくれるばかりで、自身は何も返すことが出来ていない。

そんな自分が不甲斐なくて、唇を嚙み締め、必死で涙をこらえる。泣いては駄目だ。アルトウールにもっと心配を賭けてしまう。体を

更に縮りこませ、顔を見られないようにする。今以上にアルトゥールに迷惑はかけられない。

……そう。今以上に迷惑などかけられないのだ。いつまでもアルトゥールの世話になるわけにもいかず、いずれは居心地のよいこの場所を離れなければならない。

勿論、好きで離れたいとは思っているわけではないのだが、お返しができずに世話になることは悪い、という気持ちに苛まれてきたのだ。

離れたくない、この幸せを享受していきたい。けれども、罪悪感が真子を攻め立てる。

自分は、どうすればいいのだろう。

感情は、このまま残ってしまえばいいと言う。アルトゥールが何とかしてくれる。面倒くさい不審者を、ここまで世話してくれる人が普通はいるだろうか？　きっとアルトゥールなら、アルトゥールだったら真子の環境を整えてくれるのでは？　そんな、根拠のない甘い誘惑をかけてくる。

理性は、さつさと後腐れのないよう去ったほうがいいと言う。返し切れない程の恩をうけて、自分が返すことができるのか？　何も力のない無力な自分が？　無理だろう。無理だ。だから早く離れなければ。もう、迷惑はかけられない。

「アル」

「……マコ？」

「アル……」

このまま、幸せな日々だけが続いていればいいというのに。ずっと悩んだままで、いつの間にか解決していて、それで、幸せであれば。

そうなつてしまえば、よかったのだ。

[illegible]「つ！？」
「！？」
――
「！？」
「！」

男の怒鳴り声が、響く。怒声に素早く反応し、アルトウールは何かを言う。多少分かる様になったとはいえ、早口で話されると何を言っているのか分からない。だが、アルトウールが焦っているのだけは分かった。

遠くで待機していたベルが、いつの間にか真子の近くに来て、しっぽで真子の背を叩く。混乱して戸惑っている時間が長くなるにつれ、叩く勢いは増していった。

「あ、アル、ドウナテ、ル？ ドシタ！？」

アルトウールに聞いてみても、彼は屋敷の方を睨みつけ険しい表情をしているだけで、真子の問には答えてくれない。次第に顔は険しさから苦々しいものへと変わっていった。見たこともないアルトウールの表情に、不安が膨張していく。なにか、大変なことが起こったのだと、真子は悟った。

ただアルトウールを見つめることしかできなかった真子の手をとり、アルトウールは森へと走り出す。いきなり走り始めたことに驚き、足がもつれてバランスを失い、倒れそうになる。

しかし、アルトゥールが真子を上に引っ張り、その勢いで真子を腕で抱えてまた走り始めた。腕だけで支えられて体がバランスをとれず、不安定な状態に体がこわばる。自分から触れるのはあまり好

きではないのだが、仕方なしにアルトウールの首に腕を回して安定をはかった。

いい具合に安定したところで余裕の出てきた真子の視界に、アルトールと並行に走るベルの姿が映る。どことなく、厳しい表情をしているように見えた。

これから先、何処にいくのか分からない。不安が、真子の心の中で走り回っていた。

移ろい

ゆっくりと、腕で支えながら体を起こす。手が触れた地面には、割と綺麗な大きな葉っぱが敷き詰められ、土には直接触れないようにしてある。自分が寝ていたのも、葉っぱの上だ。眠気で回らない頭を、必死に回転させ、現状を把握しようとする。

葉が敷き詰められているということは、ここは自分が寢床としている木の空洞の中だ。夜になっているからだろう、外から差し込む光は薄く、中は暗くて見難い。徐々に目を慣らし、慣れてきたところで辺りを見回す。

左隣には、先程まで横になっていた真子と平行するように寝ている、アルトゥールの姿があった。静かな寝息を立てて安らかに眠っている。いつも一緒にいる筈のベルの姿はなかった。

未だに回らない頭で、ぼんやりと眠る前のことを思い出してゆく。

人を抱えて走るのは大変だというのに、アルトゥールは泣き言一つ言わず険しい森の中を走り抜ける。整備もなにもない森の中を歩くだけでも一苦労している身としては、あまり男女の力の差を見ることがなかったのもあるのかもしれないが、アルトゥールがすぐく遅しい存在なのだと思った。自分のことを支えてくれて、慰めてくれる。根気をもって色々と教えてくれる。真子にとって、アルトゥールは偉大な存在となっていた。

——彼ならば。こんなにも遅しくいられる彼ならば、頼ってしまっても問題はないのではないだろうか？

悪魔の思考が頭をよぎる。今こんなことを考えたりするのは駄目だというのに、思わずにはいられなかった。まっすぐに先を見る眼は、強い。こんなにも強い意志を宿した眼を、見たことがあっただろうか。

アルトウールの美しくも強い輝きを放つ蒼い瞳に、どうしようもなく惹かれていく自分を感じる。……魔力でもこもっているのだろうか。いつまでも見続けていたいと思わずにはいられない。惹きつけられる、吸い込まれていく。ブラックホールのごとく、真子の心を吸い続けていくのだ。

自分を頼れと、言ってきたような気がしてたまらなくなってくる。自分がそうであつたらいいなという思い込みの結果だと分かっている、信じさせるような力が籠っていた。自分は彼にとつて迷惑にしかない存在だと、分かっているのに。錯覚だと分かっているというのに。

——アルトウールに、巻き込まれる。

悟った瞬間よしまな考えを、思いを瞬時に潰した。これ以上迷惑をかけてどうするというのだ。馬鹿な事を。そう自分を一喝させ、ただ前を見ることだけに専念した。

何分か経って息が乱れてきているのを間近で感じたが、今の彼に声をかけるのは無理だ。必死に走ってくれている中、おいそれと声をかけて気を乱すのは憚られる。ただ、黙ってじっとしていよう。そう思い実行していた途中、瞼が下へ下へと下がってゆき、逆らえなくなつた辺りで記憶は途切れている。

アルトウールに苦勞をさせて申し訳ないと思いつつも、この場に

いないベルのことが気にかかった。普段ならば真子から離れることのないベルがいない。ようやく得た平静が破られたことにより、いつもそばにいる存在がいないのが余計に不安を増長させる。眠っているアルトゥールが気になったものの、寝ているから大丈夫だろうと思い外に探しに出た。

外は月明かりに照らされているが、電灯があるわけではないので周りの様子はぼんやりと分かる程度だ。迷わない程度に散策を抑えつつ、ベルを探しに一番近い川へと行くことにした。

ベルはすぐに見つかった。見つかったのだが、ベルと相對する形になっている、今まで見たことのないモノがいる。夜目で、いまいち姿ははつきりしない。上半身は人のような形だが、下半身は後ろにも伸びたスカートのような形に見える。変な格好だな、と思いながら見ていたが、ベルが自身に気づいたらしく相對していたモノと共にこちらに向かってきた。

「どのような者が主になったのかと思えば……、これは、これは。ふふふふ、我らが主に相応しき風貌ではありませぬか」

嘲笑ともとれる笑い声が響く。声を発したモノは、濃い紫の長い髪を腰のあたりまで伸ばした女性。青白い肌に、黒でまとまった露出の高い服装。全体的に暗い中、アクセントのように金色に光る瞳。そして――腰から下は、紫に黒の斑点がまぶされた蛇の下半身。

「蛇……女？」

「我のことはズイーミヤとお呼び下さい、我が主よ」

ズイーミヤの浮かべた深い笑みに、真子の全身の鳥肌が立つ。警報が頭の中で痛いほど鳴っている。なのに、動くことができなかった。去ったら駄目。どうしてか、そんな司令が体に行き渡っていた

のだ。去ってしまいたいの、体はいうことをきかず、勝手に声を出す。

「分かった、ズイーミヤね」

「ええ、そうです我が主」

今度はうつとりとした表情になるズイーミヤ。……怖い。怖いはずなのに、自分に心酔するズイーミヤを見て心地良いと感じる自分が、いた。

終わり

一体、自分は どうして しまったの だろう。何故、心地良い などと 感じて しまった のか。自らに 巣くう 奇妙な 感覚が 気味悪く、足元が 冷たくなっ ていくの が分かる。こんな、優越感を感じる ような 汚い モノなど、持っ ていた くない というの に。

「どうなさったのです、我が主」

恐ろしい程の美しい笑みでズイーミヤは真子を見つめてくる。そのまま、意図しない声が出そうになって口を掌で固く塞ぐ。まるで他の誰かが自分の中で勝手に喚いているようだった。自分というものが奪われていく、崩されていく。北穂真子という自分を壊そうとしている。駄目、絶対に駄目！ 私は私なんだから！ 自身を壊されたくなくて、必死にズイーミヤに対して否定をする。

「違う！ 違う、私、貴方の主なんかじゃない……！ 私はそんな人なんかじゃない！」

「我が主が主に相応しき風貌を持ちながら何を仰るのです。その美しき濡れ羽色の髪と、全てを宵闇に導く瞳。貴女様を見て、人間共が恐れおののくのも当然でしょう」

「……な、なに、それ？」

脳内で金色が踊る。赤が舞う。何かが飛び散る。黒が走り回っていく。

——気持ち悪い。シャットアウトしろ、見てはいけないものだ。思い出してはいけないものだ！ 警告、警告。思い出すな。忘れて

いろ。忘れたままでいい。それがいいのだ。それでいい。思い出さないで。お願い。……思い出したくないの。

凍りついた表情になりかすかに震えだした真子を見て、ズイーミヤが意地悪げに微笑む。

「知らぬ上にお忘れのようですね、我が主。人間共が畏怖する黒は我ら魔の象徴。しかしながら完璧に黒一色を持つものはおりませぬ。現に我もまだらな黒しか持たぬのですよ」

「……ベルは？　ベルはどうなの」

ズイーミヤの横に立ち真子をまつすぐに見つめているベルを見る。ベルは全身が黒の体だ。黒を持つものが主になるというのならば、ベルも条件を満たしているではないか。今度はズイーミヤを見るが、あいも変わらず小馬鹿にした笑みで真子を愛おしそうに見ている。

「そやつは我らが主となるべき者を見定めるやつであり、主を守る為に存在するもの。人型をとれぬ者です。そのような者は主に相応しくない。それと、眼が黒ではありません故」

「……訳分かんない。なんで、どうして？　なんで私が主とかそういう人にならなきゃいけないの？　どうして黒が駄目なの？　そんなの日本にはたくさんいるよ！？　何がなんなの。やだ、やだ、なんでこんなことになってるの？……！！」

膝を折り駄々っ子のように嫌だ嫌だと首を振って、現実を受け入れまいとする。いくら否定したとしても時が巻き戻るわけでもないのに、ひたすら一つ覚えのごとく嫌だ嫌だと言い続けた。

「ふふふふふ、可愛らしい我らが主ですこと。……ひとまずここから離れましょう。人間が近寄ってきていいのです」

わがママを言つて困らせる子供を見る親の目付きをしながら、真子の手を取り立たせこの場から離れさせようとする。このまま従うかと思いきや、地面に座つて抵抗を始めた。流されるものだと思つていたズイーミヤはわずかに目を見張る。

「主よ、このままいらしても人間共は貴女様を追い詰めるのみ。それでもよろしいのですか？」

「ちが、ちがう、けど、待つて、待つて！ アルが、アルがいるの。アルを置いていけない！」

今まで自分を支えてくれたアルトウル。沢山世話になつた彼をそのまま置いていけるはずがない。なにより、誰よりも安心を与えてくれる彼と離れたくないのだ。彼といると幸せでいられる。不幸続きである真子が心の拠り所を簡単に手放すことなどしない。

ひどく必死な主人に、微笑みばかりだった表情が歪んでいく。誰が主を誑かしたのであるうと怒りに震え、眉間にしわ寄せながら事情を知るモノに眼を向けた。睨み合っていたかと思うと、ズイーミヤがベルに嘲笑を向ける。そして視線を外し、元の笑みへと表情を戻して今度は真子に眼を向けた。

「さて、我が主よ。人間が我らの黒を恐れることをお忘れですか？」

無論忘れてなどいない。軽く頭を横に振る。黒髪黒目というなんの変哲もないことが罪になるだなんて、ありえない現実など忘れるものか。深く唇を噛んで現状に耐え忍んでいると、一筋の血が流れ落ちた。

「黒を身に纏い、黒を近くに寄せるだけでも人間は排除するのです。たとえ、同胞であろうとも」

人は黒を嫌っている。黒をもつ人物も嫌い。黒を身にまとう人も嫌。黒を近くにおいている人も駄目。自身は黒。嫌われる対象となっている。嫌われる黒を持つ、自分と一緒にいるアルトウルもまた――。

「アルが、危ない……？」

「正解です我が主よ」

呆然と起こったことを眺め抵抗しようとも抵抗できずにいた真子だったが、今分かったことだけは聞き捨てならなかった。

駄目だ。それだけは避けなければならない。自分が迫害されるならまだしも、普通の人間でなんの罪もないアルトウルまで迫害されるのは絶対に駄目だ。彼は暖かさをくれた。楽しさをくれた。陰鬱なことばかりだった自身の心を、救ってくれたのだ！

真子にとって、アルトウルは神のような存在と化していた。見返りを求めず色んなことを与えてくれるおかしな、けれど優しい太陽の人。神格化された人を、誰が汚されることを見越して側にいて欲しいと思うのだろうか。

楽しかった、嬉しかった、幸せだった。今でも側にいて欲しい。けれどそれは自分のわがまま。わがままで彼を困らせるようなことはしたくない。散々与えてもらったのに今度は人としての生活を奪うことだけは、絶対に。理不尽に自分の生活がなくなってしまった自分のようにはさせたくないから。

……だからこそ、真子はしたくない決心を一生懸命固めてした。

――アルトウルから、離れることを。

ひたすら悲壮な顔をするだけだった真子の表情が、なにか押し込めたようなものへと変わる。苦しみながらも進もうとする主に、ズイーミヤはうすく微笑んだ。

「決意なさったんですね」

「……でも、せめて、お別れを、言いたい、の」

「仰せのままに。しかれども主よ、早々に願います」

ゆっくりながらも、こくりとひとつ頷き、ベルとズイーミヤを伴いながら寢床としていた場所へと歩き出した。

崩れる

寝返りをうつたのか、アルトウールは真子が起きた時の体制から変化していた。僅かに頭を左に寄せて仰向けに寝ている。ただ寝ているだけというのに、絵画のごとき美しさがあり真子は思わず見とれてしまった。一緒についてきたベルが、鼻をフンと鳴らしたことによって現実に戻る。そんな場合ではないのに見惚れてしまった自分を恥じ、頭を思いきり振った。自分がこれからするのはお別れだ。確かに名残惜しいが見惚れている場合ではない。……けれど、アルトウールは寝てしまっている。わざわざお別れを言うために起こすのは憚られるし、起こせば——自惚れかもしれないが引き止められる可能性もあるのだ。

お別れは言いたい。だけど起こすのは駄目。散々悩んだ末、寝ているままアルトウールにお別れを言うことにした。近くに寄ってしやがみアルトウールの顔を見ながら喋りだす。

「アル……。ごめんね、私のこと色々助けてくれて。本当にありがとう。私、すごく嬉しかった。本当に嬉しかったの。……黒って、ここじゃ駄目な色なんだよね。それなのに、私のこと助けてくれて……。でも、もう私いなくなるから、だから……」

そういえば、アルトウールは何故自身のことを助けてくれたのだろうか。黒が禁忌とされているはずならば、真子のことを気味悪がって近寄るところか助けることもしないだろう。よく分からないアルトウールの行動に首を傾げたが、助かったことには変わりないのだ。だからこそ、恩人を危険な目にあわすことはできない。

「そう、だから、……だからさようなら。アルがいてくれて、よかった。ありがとう、……だ、大好きだよっ」

聞いていないからこそ、言えることであつた。面と向かつて言うのは恥ずかしくて絶対にできない。とはいえ、真子にとつては好意を伝えるだけでも恥ずかしい行為であり、顔を真っ赤にさせて手のひらで顔を覆う。しばらく羞恥していたが、ズイーミヤの咳払いに肩を震わせた。……真子はすっかりベルとズイーミヤがいることを忘れていたのだ。忘れていたからこそできた事ではあるが。更に赤くなつていく頬を叩くと可愛らしい音がたつた。このまま穴に埋もれてしまいたい衝動をなんとか抑えつつ立ち上がつて、アルトゥールへ目を向け忘れないように心に焼き付けて、そろそろ出ようと足を動かそうとした時だ。

寝返りをうつたアルトゥールの懷から、一つの小さな茶色の紙袋が転がり落ちる。なんだろうと疑問に思い、いけないこととは思いつつも気になつたので拾い上げて見てみた。袋の口は折り曲げられているだけで、簡単に中を見ることが出来る。これなら中身を見ても大丈夫だろうと開けて取り出して見てみると。そこに入っていたのは、アルトゥールの瞳を思い出させるようなサファイアの宝石が、細い鎖に通されているペンダント。月明かりに照らされて、淡く光を反射し美しいさまを見せていた。紙袋の表面には文字が書いてあるが、勉強を怠つたせいで読むことはできない。……誰かにあげるために持っていたのだろうか。自分ではない、誰かに。

真子にとつて嫌いなモノが、よくない感情が沸き上がってくる。滅多刺しにして消そうと試みるが、後から後から沸き上がつて消えてくれない。綺麗サッパリなくなつてほしいのに、しぶとく心に蔓延り続ける。

——この感情は、嫌いだ。

一度ペンダントを紙袋に入れてポケットの中にしまい、空いた両手で顔を勢い良く叩き溜まった感情を掃除していく。一箇所に集めてまとめて壺に入れて、きつく蓋をして収める。絶対に開かないように、きつく。きつく。

ひとつ、深呼吸をして心を落ち着かせる。

聞きたいけれども、これから自分はアルトウルと離れなければならない。だから、駄目。そう言い聞かせて、ポケットから紙袋を取り出し元あった場所に戻そうとするが、横から伸びてきた手によって阻まれる。まさか止められるとは思わず、目を見開きながら止めた人物を見た。

「ズイーミヤ」

「……我が主よ、苦しいのでしょうか？」

「苦しい……？ 苦しくなんかないよ。ただ、……」

どう言えばいいのかわからない感情が、あっただけだ。しまおうとしても溢れ出しそうな、どろどろとしたものが。それを抑えようとするのが辛いといえばそうだ。けれどこの胸の苦しみは必要なもの。耐えきらなければならぬ。そっと手を胸にやり、苦しむ胸の内を安らげようとする。呼吸の荒くなっている主人が苦しみから逃れるのを防ぐかのようにズイーミヤは、胸においた指を一本一本とって剥がした。そして、優しく微笑む。

「お辛いのでしょう？ 無理に押し込めることはないのです。今ここにいるのは貴女様の味方のみ。ご自分のしたいようになさればよいのです。さすれば、苦しみから開放されるのですよ？」

嫌いな感情を押し込めるのをやめ、開放するだなんてことはでき

なかった。押し込めているからこそ自分は自分であるのだ。北穂真子という自分で。やめてしまったら、自分が変わってしまう。自分でなくなってしまう。きちんと我慢のできる偉い子、賢い子のお姉ちゃんでなくなってしまう。もし開放してしまったら、自分は。

暴れだそうと壺の中でもぐ感情を、一層奥へとしまい込む。――これで、大丈夫。そうやって、一息ついたのがいけなかったのだ。どこからか抜けてしまったのだ。

醜い、本音が。

「や、やだ、絶対そんな事しない、だってそれじゃあ泥棒だもん、だから、絶対やらない」

「ふふふふふ、我はそのようなことは申し上げておりませぬが」
「え、」

今、自分は、なんて、言ってしまったのだろう。

感情を押し込めた壺が、大きく揺れる。ぐらぐら、ぐらぐら。今にも倒れてしまいそうだ。抑えて揺れをどうにかしなくてはならないのに、身体が、心が固まってしまい動かない。止めなくては。止めなくては――！！

「もう、この者とは会うことはないでしょう。それなのに主はよろしいのですか？ この者と過ごした記憶だけで、あなたは満足なさるのですか？」

「そ、そんなの……！」

できるわけ、ないよ。

壺は大きく揺れ、鼓膜を引き裂いてしまいそうな程の音を立てて、

割れた。

「あ、あああああああ、あああああああああああ
！！！！」

解放されてしまった感情が、真子を瞬く間に支配していく。

欲しい。欲しい。欲しい。欲しくてたまらない。綺麗なペンダントが欲しい。アルを思い出させるペンダントが欲しい。自分のものにしてしまいたい！ 他の知らない誰かに渡したくなんかない、これは私だけのものにするのだ。アルとの思い出にするのだ！ 他の人あげるつもりだったのなら、また今度やればいい。自分二度とアルトウールに会うことができないのだ。だから、だから……それくらい、いいだろう？

「ごめん、ごめん、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！！！ ごめんなさい！！！ ごめんなさい！！！ でも、でもっ！ 私、私、わた、し、あ、ああああ、ああああ……」

——あなたと一緒にいたという、証拠が欲しかったの。

ズイーミヤは細く笑い、紙袋を握りしめて泣きじゃくる主人をそっと抱き込み、小さな体を自らの左腕の上に座らせる。背中を優しく叩きあやししながら、ベルと共にゆっくりとその場を去っていった。

Die Umstände des Jungen

全てが、彼にとってつまらないものだった。良いものは全て、兄と弟に持っていかれたのだ。いくら自身に目を向けさせようと頑張れども兄と弟は更にその上をいく。唯一兄も弟も手を出さない剣術に手を出してみても、師となった人は真面目に教える気はなく無駄だった。失敗をする度、駄目だ駄目だと叱るのみ。具体的にどこが駄目なのか指摘することなく、叱るだけで彼は惨めな気持ちになるばかり。当然彼の剣の腕は上達せず、もしかしたらなにか取り柄ができるかもしれないと思っていた親に見切りをつけられ、剣を握ることはできなくなったのである。

そうして思い知った。結局自分はなんの力も持たない、ただ存在しているだけの者なのだ。生まれたことに意味などない、あるだけの者。自分はそういった者だと考えるようになった。周りにあるものは全て、彼以外の者の為に存在している。決して彼の為にあるわけではないのだ。

気がついたら、周りは全てつまらないものに変わった。いや、元からそうであったのに気がついてなかっただけ。次第と彼は無気力になり、何かに興味を示すことがなくなっていった。何をしても得にはならない。日に日に表情がなくなり衰弱していく彼を思っただのか、ただやっかい払いがしたかっただけなのか、療養として別荘に送られることになった。

別荘で暮らすようになった始めの頃は、屋敷にいた時とそう変わらない日を過ごした。どんなに環境が変わろうとも自分の為に存在するものなどありはしない。ただ、生きるだけの日々が続く。

そんな彼を変える、ひとつの出来事が怒った。

屋敷の裏にある森に隣接した庭で、出されたお菓子を食べている時だった。ふと森の方を見ると木が1つ朽ち果てていたのだ。今まで気づかなかったことに驚きつつも、——このまま同じように朽ちてしまえばいいのに、と彼は思った。今の自分は木と同じ日々を過ごすだけのモノ。だったり同じく朽ちてしまえばいい。この木が朽ちていたのを知らなかったように、皆が気がつかないまま死んでいくのだ。そうしてしまえば——。

草を踏みしめる音に、彼は意識を浮上させ音の方向へと顔を向けた。この場所は貴族御用達の別荘地ということもあり、生活面の事以外であまり人が来ることはない。ましてや今いる場所は庭である。こんな所から人が来ることなどめったにないのだ。もしあるとすれば、それは魔物。人の住んでいる付近には現れることが少ないが、それでも来るモノは来る。通常ならば魔物と遭遇してしまう前に家へと駆け込んでしまうのが良いのだが、彼はそうしなかった。ここで殺されたとしても別にいい。生き延びても無気力な生活を送るだけだ。彼は魔物の象徴とされる——人々に忌み嫌われる色、黒を探し始める。そして見つけたのは、踵を返し森へ消えようとする黒の子供だった。

「まさか魔人なのか？」

思わぬ出会いに口から呟きが零れた。魔物は異形のモノであるが、魔人は魔物の上位存在で人間と同じ姿をしている。知能が高く力も強いので、倒すのに一苦労し損害も大きい。しかしながら大人の姿しか存在を確認されていなかった。まさか子供の魔人がいるとは——。思ってもみなかった出来事に少し心踊らせる。例えそれが誰にも知られなかったとしても、魔人の子供を見ることができたのは自

分だけだ。自分の最後としてはいい土産だろう。そう、彼は思った。されども子供の魔神が振り返ったことにより、彼の心境は激変していく。

振り返った子供の魔人は、少女だった。黒の衣服を身に纏い、肩にかかるくらい黒髪を軽く靡かせている。なにより一番目を引いたのが、少女の表情。誰かにすがりつきたいのにできない、けれど希望を捨てきれない。そんな表情で。

ああ、俺が守ってやらなきゃ。そう思った。それが本当はどういった気持ちであるか知らずに、彼はそう思ったのだ。今この場で助ける事ができるのは自分だけ。今までの自分を打ち破れるのなら黒だろうが魔人だろうが関係ない。俺が救う。俺が守る。俺だけがこの子を支えてやるのだ。俺だけが。俺だけがこの子を守ることが出来る。今この場所にいる俺だけが！

心にひとつの灯火が揺らめく。段々と大きくなっていき、瞬く間に彼の全てを支配していった。先程までいた無気力な彼は、もういない。彼は、変わったのだ。全てを少女に捧げる人間へと。変わってしまったのだ。

もう、彼の中で少女を守ることは決定していた。荒く息をたてて怯えている少女に、できるだけ優しく声をかける。

「どうした、大丈夫か？」

「――……」

魔人の少女は言語を、喋った。魔人も魔物も雄叫びをあげることはあるが、言葉を持たないとされている。詳しくは説明されていないが、魔物達は何らかの方法で意思疎通を測っているらしい。

……この少女は何故こんなにも、自分にとっての特別を沢山くれるのだろうか。誰も知らない。自分だけが。他が知りうることで

きなかった事を、自分が知っている。きっと少女は自分に特別を与えたとも思いもしないだろう。それでもいい。それでいい。特別をもたらした事実が消えないのだ。

「――、――、……」

「落ち着いて、俺は敵じゃない！」

酷く動揺している少女を落ち着かせようと、少女の肩を両手で軽く叩いてみる。さまよっていた視線は真っ直ぐ彼に向かった。闇の瞳が彼を貫く。衝撃が体の中を駆け巡る。まるで炎が燃えているかのような。得体の知れない感覚に今度は自分が戸惑ったものの、彼方へ追いやり少女に言葉を送る。今感覚を問いつめている時間ではない。

「心配しないで、俺は君に危害は加えない」

あまり笑うのは得意ではないが、安心させる為にも作った笑顔で接する。そんな作り笑顔でも安心してくれたのか、一度深呼吸をして心を落ち着かせてくれた。自分を信じてくれたことが嬉しくて彼は心からの笑みを浮かべる。こつも自然に笑うことができるなど何年振りだろう。

この時、間違いなく少女は彼にとつての救世主となった。この出会いが後にどのような影響を及ぼすのか、知っていたとしても。

「――……」

少女はか細い声を出したかと思うと目に涙を貯め始め、ひとつひとつと涙を頬へ落としていく。途中止めようと努力していたが、やはり耐えられずに涙を流すばかりだった。

泣いて欲しくない。けれど泣く姿も見たい。矛盾した想いを

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4276t/>

魔王と呼ばれた女

2011年11月30日01時49分発行